

漢詩神奈川

第18号

神奈川県漢詩連盟
事務局

川崎市麻生区王禅寺西
2-19-3

TEL-FAX
044-965-4950

発行人 岡崎 満義
編集人 三村 公二

神漢連設立十周年に向かつて

神奈川県漢詩連盟会長 岡崎 満義

五月二十日の総会で予算・決算、事業計画、新人事、組織整備：などを承認してもらい、いよいよ平成二十七年年度の神漢連の活動が始まった。といっても、四月からはすでに第九期生にあたる初心者入門講座が動きだしている。今年は例年を大きく上回る五十数名の申し込みがあり、教室となる神奈川近代文学館中会議室は定員五十名、やむなく数名の方々には漢詩鑑賞会を紹介し、実作講座は来年まで待ってもらおうことにした。文字通りうれしい悲鳴だ。



どうして今年はこのように大盛況になったのか、実のところよく分からない。八年間の様々な実績、中でも内容充実のホームページが定

着したことが大きいのではないか。団塊の世代が本格的な定年退職の時期を迎えている。この世代は現役時代、仕事でパソコンをあたり前に使いこなしていたはずだから、神漢連のHPへのアクセスなどがたやすいことだろう。仲間ですんなり話をし、初心者入門講座の盛況ぶりを一応納得した。いずれにせよ、神漢連の活動の盤石の基盤はこの初心者入門講座にある。ここから年毎の漢詩サークルが出来、漢詩の勉強とともに神漢連をリードしていく「人材」が輩出する。各サークル交流会が発展して「バトル漢詩甲子園」が生まれ、城田六郎理事を中心に「七言絶句ここから一歩——佩文齋詠物詩選七絶抄」を神漢連叢書第一号として刊行することもできた。二月には漢詩女子会として古田光子・水城まゆみさんを中心に「霧笛(無敵)女子会」も誕生した。



人間にも組織にも求心力と遠心力がある。二つの力の微妙なバランスの上に活動がひろがってゆく。その二つの力の強弱に差がありすぎると、力の働きにゆがみがでて充実した活動はできなくなる。神漢連の求心力は何よりも初心者入門講座である。「バトル漢詩甲子園」や霧笛女子会は遠心力に相当するだろう。そして来年は神漢連設立十周年の節目の年である。

十周年にふさわしいイベントをやってみたいと思う。十周年企画委員会も動き始めている。力強く組織の「遠心力」が機能するように願っている。神奈川県、横浜市、そして地元の横浜中華街、神奈川新聞社、有隣堂、DeNA、朝日カルチャーセンター横浜：などの企業と提携するかたちで面白いイベントができないだろうか。「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」方向で神漢連をさらにひと回り大きくしたい。

第十回総会結果の報告

事務局長 三村公二

五月二十日(水)に開催された第十回総会(出席者七十四名、懇親会四十四名)の主たる決議事項は以下の通りである。その後の実施項目を含めて以下の如く報告する。

一、人事

- ・会長以下理事・運営委員は全員留任
- ・中島義和氏を運営委員に新任

二、決算報告・予算案

- ・提案通り、承認された。(十一頁に掲載)

三、規約改定…(改定規約は会報に同封送付)

- ・会員数二百五十名に成長した連盟の実情に合うように改定
- ・主たる改定項目は

総会／理事会／執行理事会の機能・役割の明確化

執行グループ組織の新設

補則に竹林舎規定を追加 等

四、活動計画

- ・従来からの活動は今年度も継続
- ・昨年度スタートした竹林舎舎友による次の事項も継続実施

漢詩鑑賞会 A (講師 玉井幸久舎友)

漢詩鑑賞会 B

(コーディネーター 住田笛雄舎友)

霧笛(無敵)女子会

(講師 古田光子舎友)

鑑賞会 C・七絶一步(講師 城田六郎・飯沼一之・桜庭慎吾舎友)は六月二十三日(火)に第一回が開催されスタートした。(四頁に記載)

五、今年度の重要検討課題

・年会費問題

次の二つの視点から検討開始、十分議論をして慎重に対処

*年会費だけで連盟の経常経費を充足する

*全日本漢詩連盟からの一括加入要請への対応

・神漢連創立十周年記念行事(来年十月)の準備作業

連盟若手を中心に企画委員会を立ち上げた(敬称略)

田原、三村、高津、池上、生駒、板本、

妹脊、大原、大森(冽)、小菅、香取、

中島(義)、久川(憲)、松井、横溝(比)

第一回会合を六月十九日に開催、検討をスタートした。

総会講演

◇講演 石川忠久 先生

◇講題 「江戸後期の詩人たち」

講演録は今号より掲載を省略しております。神奈川県漢詩連盟のHPをご覧ください。音声のみにて提供しております。アドレスは

(<http://shinkanken.sakura.ne.jp/>)

なお、希望者にはCD化し、講演資料も添付して頒布します。

頒布価格 五〇〇円(送料込)

申し込み方法は会報同封の振込み用紙をご利用ください。



総会懇親会

石川忠久先生玉詩

新知舊識垂三百 新知旧識 三百に垂んとす
切磋年年意自雄 切磋年々 意自から雄なり
席捲扶桑文氣盛 扶桑を席捲して文氣盛ん
更加潑瀨女郎風 更に加る潑刺たる女郎の風

窪寺 啓先生玉詩

高堂佳宴笑談融 高堂の佳宴 笑談融く
金港詩人意氣雄 金港の詩人意氣雄なり
歳歳親交及三百 歳々親交三百に及ぶ
蜻州最盛靚妝風 蜻州最盛靚妝の風

**「金港雪朝」
で
バトル!!**



第三回
バトル漢詩甲子園
盛会裏に終了

第四回サークル交流会は三月六日(金)、神奈川近代文学館においてバトル漢詩甲子園として開催された。今年は昨年度の新人研修後に発足した「八起会」を加えて九サークル、一般参加者も含めて合計六十九名が参加して実施された。各サークルのバトルは事前討議を十分に行って、バトルに参加したため昨年以上の活発なバトルとなった。

今年度の「バトル漢詩甲子園」の概要、特色は次の通りである。

◎本年度は新たな試みとして、窪寺先生に予め「金港雪朝」の詩題を事前に頂いた。このためサークル員が同一の詩題で作詩したため、各サークルの代表作の選抜、他サークルの作品について事前討議を十分に行うことが出来た。このことがバトル本番での議論を昨年以上に盛り上げることになった。本年度も窪寺先生に各サークルの代表作品に懇切なる批正、添削、講評のご指導を頂いた。本年度の優秀作品は次の通りであった。

- 最優秀賞 金星会 上田 尤子
- 優秀賞 三水会 大谷 明史
- 佳作賞 岳精会 前嶋 彩江

◎今年には窪寺先生の選考とは別に参加者全員が自分の好きな作品に投票することを実施した。投票結果は、窪寺先生の評価と会員の評価が全く異なる結果となり、参加者の興を誘うことになった。上位の作品には懇親会場で会長特別賞が贈られた。

◎昨年の詩吟・揮毫作品の展示に加えて、本年はフォト&漢詩の展示が行われた。詩吟は最優秀作品がバトル会場で、その他は懇親会場で吟詠された。

展示作品は、揮毫「八つ切り」四首、「色紙」四首、フォト&漢詩十一首、その他の方の色紙四首であった。

◎懇親会は例年通り会場を移して総勢五十九名が参加して行われ、吟詠をはじめ楽しいスピーチが飛び交ってサークル間の交流を深める有意義なものであった。

窪寺先生から懇親会場で次の即興玉詩を頂いた。

懇親會席上即詠 窪寺貫道

鬪詩戰罷港邊樓 詩を闘わせ 戦い罷む 港辺の楼
 歳歳更爲翁媪遊 歳々 更に為す 翁媪の遊び
 料峭春風吹萬里 料峭 春風 万里を吹き
 各聲赫赫滿靖州 各声 赫々 靖州に満つ

【金港雪朝】作品と窪寺先生の批正

佳作賞作品(岳精会)

六花亂舞埠頭邊 發港灣
 大虞危 髣髴銀橋帶薄煙
 時見閃雲罅 雲散朝暉照灣口
 巨船放纜 洋洋船往雪晴天

優秀賞作品(三水会)

雪霽薄明浮列檣 漸
 今朝金港著銀裝
 大橋高閣法山眺
 法山遙望千枝申
 幾十掠波 凍冽灣頭鷗鳥翔

最優秀賞作品(金星会)

朔風凜凜季冬天
 曉雪初晴四望鮮
 汽笛一聲空響 翻浪處
 白粧海港去來船

【連盟の諸活動】



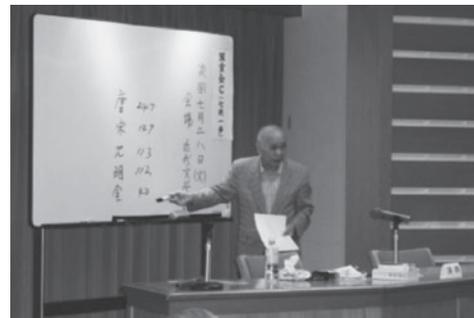
鑑賞会C「七絶一步」新たに開催

「七言絶句ここから一步」(佩文齋詠物詩選七絶抄)が神漢連から発行されて半年余りが過ぎました。この間にこれを利用した勉強会をぜひ行いたいという要望が多数寄せられました。連盟ではこの声を聞き入れて、新たに鑑賞会C「七絶一步」と銘打って鑑賞会A、Bに続いてCが発足しました。

初回は六月二十三日(火)近代文学館大ホールに六十余名の会員が集い、盛大に開催された。城田六郎講師による講義が一東の韻より十首(予定は十二首)の解説が行われ、詩の内容はもちろん、その時代の背景、作者の略伝など詳細に説明された。話は熱を帯び予定時間内に収まらず終わりの二詩を残し次回まわしとなってしまった。

「七言絶句ここから一步」は白文と作者のみの記述であり、これだけでは理解困難な点があり、城田六郎、飯沼一之、桜庭慎吾の三氏により読み下し文と語釈、詩の解説をお願いし、これを新たな資料として参加者に配布した。従って講義に加え詩の理解が一層深まったことは疑いないところであろうと思われる。主催関係者一同安堵して閉会となった。

引き続きこの「七絶一步」は七月二十八日(火)飯沼一之講師、八月二十五日(火)桜庭慎吾講師の担当により近代文学館大ホールでの開催を予定している。まだ会場には



余裕がありますのでさらに多くの会員の参加を期待しております。当日会場で受け付けております。年会費二千円です。

(中島龍一)

「七絶ここから一步」販売状況 神漢連叢書「七言絶句ここから一步」 全国に展開!

「佩文齋詠物詩選七絶抄」は当初、神漢連会員の詩作に役立てて頂こうと編集・発刊したものであるが、全日本漢詩連盟の会報に紹介されたこともあって、北は東北から南は九州まで全国からの引き合いが続ぎ、最初に印刷した二〇〇冊は忽ち売り切れた。将来的にも価値が下がらない役に立つ本だからという皆さんの声におされて、二〇〇冊増刷したら印刷所からサービスでもらった三十冊を残して完売した。神漢連関係者で約百五十冊、残りの二百五十冊は他

県連の方に買って頂いた勘定になる。これは近畿漢詩連盟や東京都漢詩連盟のように自らの会報にこの本を紹介してくれたことも大きく影響している。ただただ感謝、感謝である。

又、この本を買って頂いた二、三の他県連の方から、この本の詩は市販の漢詩関連の本に掲載されていない詩が多い。神奈川ではどうやって勉強しておられるのか? という問い合わせがあった。竹林舎舎友の先生方による「漢詩鑑賞会C「七絶一步」」の講義の意義はその観点からも非常に大きいと思われる。

(三村公一)

「霧笛女子会」に参加して

平成二十七年二月三日、神奈川近代文学館で女性だけの勉強会(偶数月・第一火曜日)が始まりました。岡崎会長に「霧笛女子会」と名付けていただき、気分がぐーんと若返りました。

水城先生の穏やかな、ゆったりとした司会で始まり、古田先生の明るく張りのある声で、二千年を隔てた詩(作者又は詩の内容が女性)がテンポ良く解説されます。詩人達、詩の中の登場人物、それを取り巻く人々が、俄然血と肉を持ち、生き生きとして動き出し、目の前に喜怒哀楽の物語を繰り広げ、瞬く間に一時間余りの時が過ぎます。古田先生の講義の後、二回目からは詩遊会の横溝比呂美さんが

「漢詩鑑賞会B」の「唐詩選画本」で研究された資料を発表されました。詳しく調べられており漢詩学習への熱意が伝わってきます。それにしても、江戸時代のかな文字の難読なこと！
 帰りは「女子会」ならではのポートピアでケーキセットとお喋りで「締め」となります。「あゝ、充実した、楽しい半日だったなあ」と満ち足りた思いで、みなとのみえる丘公園を後にします。
 (久川 愛子)

第二回寄贈本頒布会見事完売！

五月二十日の総会の日の午前中に第二回寄贈本頒布会が開催された。当初、サークル交流会で頒布する予定を総会の時にと延長したこともあつて、又、会報で二度に渡る蔵書寄贈のお願いをした結果、我が家に段ボール十箱分、二百三十五冊の寄贈本が集まった。ご寄贈頂いたのは次の六名の方々と、特に、松田様(故人)、塚本様からはたくさんの本のご寄贈をいただきまして深く感謝申し上げます。

松田滋様(故人)、塚本周吉様、城田六郎様、中島龍一様、室橋幸子様、大本久様

今回の本には、和綴じの詩集、手作りの詩語集、個人の詩集、書道関係／吟詠関係の蔵書等事務局では価値の分からない本もたくさんあったので皆さんに買っていただけるかどうか心配したが、全て杞憂に終わり見事完売できた。

前回もそうであつたが、朝早くから並んで手に入れた本を大事そうに持って帰られる姿を拝見していると、ご寄贈頂いた先輩方のお気持ち伝わっているような気がして、苦労はあつたがこの頒布会をやつてよかつたなという思いが非常に強い。機会があれば又企画したいと思つている。
 尚、頒布会で得られた浄財は、今後の神漢連の活動費として活用させていただきます。ご協力有り難うございました。(三村 公二)

恒例 春季研修会開催

恒例の研修会は三グループに分けて行われた。一グループは六月三日(水)、二グループは六月九日(火)、三グループは六月二十五日(木)にそれぞれ開催された。提出詩は合わせて三十五首であつた。



今回も、名前を伏せた詩に対して各人が投票し、得点を競つたが皆、上位は接戦であつた。各詩について忌憚のない意見、講評を出し合つて有意義な研修でした。

高得点者紹介

各グループの高得点の詩は以下に紹介する。

第一グループ

『上高地遇驟雨』

上高地にて驟雨に遇う 喜多基

天青鶯韻響山麓 天青く鶯韻 山麓に響き
 水洌銀鱗躍澗淵 水洌く銀鱗 澗淵に躍る
 電閃俄奔雷獸吼 電閃俄に奔り 雷獸吼ゆ
 雨師乍去玉虹懸 雨師乍ち去りて 玉虹懸る

この詩は、全対格仕立てにし、併せて起承句の読み下しも音数律的に対句になるように試みたものです。取り組んでみて直ぐに、緊密な対句表現は如何に難しいかを痛感し、このような無謀なチャレンジは、百年早いと思ひ知らされました。

天青鶯韻響山麓 電母 俄奔 轟霹靂
 水白銀鱗躍澗淵 雨師乍去掛虹霓

このように並べてみると一応対句らしくなりましたが、「水白」が上高地の梓川の清流のイメージに合わないため「水洌」に変更し、突然の稲妻を表すには「電母」より「電閃」が相応しいと思われ、「轟霹靂」は、「雷獸吼」の方が劇的だと考えて置き換えました。

鶯韻と銀鱗は、読み下した時の音数が対になるだけでなく、オウイン・ギンリンの響とリズムの効果も意図しました。

研修会場では、先生方や諸先輩から、律詩の作詩を見据えたハイレベルな対句表現のご指導をいただき、具体的な詩語を示されての懇切なご解説や多くの「ご意見を賜り、大変勉強になりました。誠に有り難うございました。」

研修会は、先学の方々の豊富な知識に直接触れることが出来る非常に貴重な場であり、神漢連の素晴らしい制度だと存じます。

第二グループ

『甲州春景』

甲州春景

丹下和幸

佛曉靈峰紅雪輝 弘曉の靈峰紅雪輝き
東風八嶽白雲飛 東風八岳白雲飛ぶ
登高俯瞰甲州景 登高俯瞰す甲州の景
滿地桃花如錦衣 滿地の桃花錦衣の如し

数年前、親しい仲間達と連れ立って甲州及び信州地方の札所巡りを行った。

その折、素晴らしくも懐かしい日本の原風景に出会いその風情にすっかり魅了されるとともに豊かな自然に恵まれた日本国に生を享け有難いことだとつくづく思った。

その時の風情と自分の思いを詩に詠んだ次第です。

神漢連の初心者入門講座以来数々の御指導を頂きました岡崎会長初め諸先生方に厚く御礼申し上げます。

第三グループ

『大島懷郷』

大島懷郷

大森 冽子

瞻望島影豆州春 瞻望す島影豆州の春
避難三句寄此身 避難三句此の身を寄す
噴火何忘衰老裏 噴火何ぞ忘れん衰老の裏
故林今日滿山椿 故林今日滿山の椿ならん

この詩は、椿の季節に「故郷」の詩を作ろうと思ひ、東京が故郷ではイメージが描けず、架空の故郷を創作することにして、避難の住処から故郷を懐かしむ舞台設定にしました。鎌倉倉由比ヶ浜からは大島が指呼に見えます。偶々創作時の紙上に三原山の噴火の記事もあったりして噴火で荒れた地も今では緑が再生しているだろうとの思いが湧き作詩しました。

研修会では「三句」は複数解釈できるので「三年」に、「衰老裏」は「衰老處」に、又、覚悟で使った「椿」はやはり国字のご指摘を免れませんでした。今回、作詩時に許容される範囲について、「冒韻」、「通韻」、「挟み平」については各人、異なる考えを持って作詩していること、国字のことも含め、必ずしも結論に至らないまでも、議論百出、駆け出しには一々為になることばかりで勉強させていただきました。

【吟社の活動報告】

詩游会「伊豆吟行会」開催

今回の吟行会は六月二日(火)、三日(水)に三島駅に集合・解散の一泊二日の伊豆の旅を催した。参加者は詩游会員と他七名の全十七名の一団。まずは、クレマチスの丘に向かい、井上靖文学館にて多くの文学作品に接した。同時にベルナル・ブユッフエ美術館に立ち寄った方も多かった。クレマチスの丘では色、種類など様々の花々を見て詩囊を肥やした一時であった。その後、朝日新聞で長期にわたる連載された大岡信の「折々の歌」の展示「大岡信ことば館」に立ち寄り、和歌、俳句、漢詩の名詩、名言に心を洗われた。

夜は長岡温泉に宿泊し、山海の幸を味わい、美酒に酔った。後は三更まで漢詩談義、神漢連の将来など話は尽きなかった。翌朝は残念ながら雨天、富士を見上げることは出来ず、送迎バスにて「華山の反射炉」へと向かった。近々世界遺産に認定予定の歴史遺産である。江戸時代末期に自国防衛とはいえこのような工業炉が出来たことは驚きである。

次は「茶摘み体験」である。茶摘みは格好(身仕度)からはじまる。例の茶摘みの衣装である。紅い腰巻、紺の着物、背中には紅いリボ





ン、茜タスキに豆絞りの姉さんかぶり、ここまですると翁媪皆一八の娘に変身となった。後ろ姿は誰とも分らない。意は童心である。ボンザルを片手に茶畑ま

で坂道を登ること数分、茶摘み歌もよろしく、蛙の鳴声、燕の飛翔など作詩の情景は十分整っていた。それぞれ摘んだ新芽はお茶に加工した方、またある人は天ぷらにして召し上がったと後日伺った。三島駅前にて鰻を食して解散となった。茶摘体験の詩を試みた。(川上修己)

茶摘体験

川上修己

青青山際薄雲流 青々たる山際 薄雲流る
採摘時宜翠茗丘 採摘の時宜し 翠茗の丘
翁媪緋裙娘子扮 翁媪の緋裙 娘子の扮
龍芽一箴已忘羞 龍芽一箴 已に羞を忘る

以文会詩集発刊・他

結成三年目にして、詩集の発刊を遂げた。是会員諸氏の努力そのものである。

二十七年度は「詩語雑記帳」(仮称)を作成すべく進行中。主旨は各人が学び、体験した事を提起して「べからず集」風の詩語辞典をスタートさせている(間違つて覚えた事も含む)。

起縁は以文会発足時に、中島龍一先生より「漢詩語録」を頂き、座右の銘として活用してきたが、二年目を迎えるに当たり、第二弾をお願いした処「もう自分達で作れ」と纏める事の必要性を言われて、思い立った事がきっかけである(中島先生は二年目でお作りになった由)。二年掛りで纏める予定なので、十一期生の頃には利用して頂けるかもしれない。あくまでも初心者対象としている。

この間の勉強会には特別講師をお迎えし、講話をお願いしている。①古田光子先生の「漢文法」。②城田六郎先生の勉強会評価(実施済み)。③桜庭慎吾先生の「杜甫」。④飯沼一之先生の「以文会詩集の選評」と「私の閨秀する三詩人」は目下実施中。

等々の勉強をしつつ習作から秀作の域になるべく努力を完全燃焼させたい。(柴田洋)

七歩会の柴本さん金賞を受賞

北九州市在住の柴本信子さんが第五十三回北九州市芸術祭において漢詩部門で金賞を受賞しました。おめでとつございます。

屋久島

柴本 忍冬

青螺疊處白雲生 青螺疊なる処 白雲生じ
峻嶺飛泉水一泓 峻嶺の飛泉水一泓
盡日尋幽淨心自 尽日幽を尋ねて心自を浄め
披襟滿耳巨杉聲 襟を披きて耳に満たす巨杉の声

この詩は神漢連HPの「フォト&漢詩」にも掲載しています。

初心者入門講座(九期生集う)

今年の漢詩初心者入門講座は、新聞・ホームページ・個人紹介などにより、応募者五十名と過去最多となった。教室の制約により定員で締め切ったのは予想外で、神奈川県民の漢詩への期待は著しいものがあると感じている。

鑑賞と実作を前面に出して募集したので、ほぼ半数の方が鑑賞希望、半数が実作希望であった。四月から六回の講義で七月九日に終了した。講義内容は、名詩の鑑賞、および漢詩の規則について全員で聴講し、実作は四回目から寺子屋指導(先生一人に生徒五人)をしている。鑑賞希望の人も実作を熱心に試みていることは喜ばしいことです。

今後、九期生の会として秋頃にはサークルを立ち上げ、実作・添削の勉強会を二か月ごとに行う予定である。講師は古田光子先生、大谷明史先生が予定されています。

七月九日に講座が終了し、新たな吟社が発足しました。世話役代表者は山口幸雄さんが担当することになりました。今後の活躍を期待します。(中島龍一)

漢詩と私

秋吉邦雄



漢詩は言うまでもなく漢字で綴られた詩である。私が漢字に関心を持ったのは、平仮名がやっと読めるようになった幼稚園の頃だった。当時の新聞雑誌や小説などの多くは、旧漢字に旧仮名のルビが振ってあったので、意味は分からずとも子供でも何とか読めた。そして分からぬ字があれば、周囲の大人や教師に訊ねたものだ。

生地大分には当時歩兵隊と海軍航空隊があったので、軍歌つまり漢字には事欠かなかった。演習帰りの兵士達が歌う「歩兵の本領」などを聴いては、『萬葉の櫻か襟の色』とか『尺餘の銃』ってどういう意味?』といった調子だったのかもしれない。

そして、私が漢詩に出会ったのは、昭和二十年旧制中学一年生の時である。四月入学後ろくに授業も受けぬままに勤労働員に駆り出され、その八月に終戦を迎えた。「これからは生徒に何をどのように教えていく

べきか」と当時の教師達は暫し戸惑ったようである。

その中で、国語の教師が教科書代りにいち早く取り上げたのが漢詩であった。大分県と言えば、まずは日田が生んだ儒学者で漢詩人の廣瀨淡窓・旭莊兄弟の漢詩だ。この教師、早速淡窓の「桂林莊雜詠示諸生」や旭莊の「竹」などをガリ版刷りのテキストで教え始め、生徒に誦んじさせたりもした。その後の漢文・漢詩といえ、中学三年までは国語テキストの中に、唐宋の名詩などが僅かながら織り込まれていたが、新制高校になってからはそれも無くなった。爾来六十余年、私は漢文・漢詩とは無縁の徒となっていた。

ところが平成二十四年四月、それまで無為徒食を続けていた私は、友人の勧めもあつて一念発起、玉井幸久先生の漢詩鑑賞講座を受講し始め、同時に玉井先生のご紹介で神漢連主催の初心者入門講座(第六期)にも参加することとなった。

私にとっては漢文・漢詩との六十余年ぶりの再会であり、その上初めて漢詩実作の道にまで踏み込んだわけである。

その後初心者入門講座(第六期)受講の仲間達と「以文会」(論語、顔淵第十二に依拠)

を結成。桜庭慎吾先生・中島龍一先生・池上一利先生のご指導の下、今なお麗沢の友として詩作に励んでいる。更には、桜庭先生のご紹介で平成二十五年九月から朝日カルチャーセンター横浜の窪寺啓先生(漢詩実作講座)に入門し、今日に至っている。窪寺先生のご批正は毎度感じ入ることばかりであるが、このご教示の内容を常に拳々服膺し、少しでも実践できるようにしたいと願っている。

とまれ、晩学八十歳で歩み始めた漢詩の道である。しかもこの道は如何にも奥が深くて険しい。己の残年を考えると、今後果して何処まで辿れるかとの危惧も勿論ある。しかし、「驚馬十駕」という非才の私に向いた(?)言葉もある。

加えて思い出されるのは、岡崎満義会長のエッセー「漢詩のすすめ」の中の一節である。曰く、「高齢者は孤立しやすい。この先は『独り学び・独り遊び』から『共学び・共遊び』の場に飛び込んで、アマチュア漢詩人として詩的なホモ・ルーデンス(遊ぶ人)へと自分を変身させることが大事だ」と。

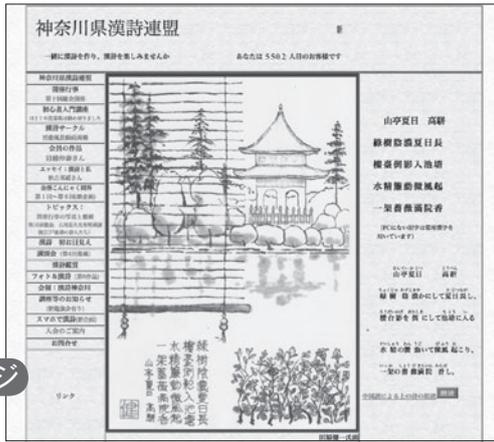
正に然り。何歳になろうとも常にこの気概と遊び心を忘れずに、一歩一歩着実にこの道を辿り続けたいものである。

<http://shinkanren.sakura.ne.jp/>



※スマホからも見られます。
(動画再生には再生アプリが必要です)

トップページ



ホームページの新企画 飯島敏雄

ホームページのトップページの玉井先生による名詩鑑賞とその詩に合わせて描かれた田原副会長の挿入画、および中国語による詩の朗読に続いての、会員の作品、エッセイ「漢詩と私」、講座の紹介、および初心者講座、総会、吟行会の写真や動画を使つての紹介(トピックス欄)等の項目は、毎月あるいは項目によっては二、三か月毎に順調に更新されて閲覧者も五千名を超えています。これに新企画として昨年十月から「金港こんにやく問答」と、一月から「フォト&漢詩」が加わりました。

新企画・金港こんにやく問答
「漢詩と私：漢詩の味・人生の味」
インタビュー：岡崎満義会長

下の写真をクリックして対談を動画でお楽しみください。動画画面は大きく出来ます。

第3回 石浜康彦さん 第4回 本間洋子さん

フォト&漢詩
(第8作品) 飯島知林島 柴本信子

飯島知林島 柴本信子
南川成茂鳥巻類
水碧湖平島頃春
清曉砂洲獨閑歩
松風奏足伴吟身
飯島知林島
南川成茂鳥巻類なり
水碧湖平島頃春なり
清曉砂洲獨閑歩なり
松風奏足伴吟身なり
飯島知林島
南川成茂鳥巻類なり
水碧湖平島頃春なり
清曉砂洲獨閑歩なり
松風奏足伴吟身なり

フォト&漢詩

「金港こんにやく問答」は岡崎満義会長がインタビュアーとなり、秋吉邦雄さんはじめ毎月変わるゲストの方々に「漢詩と私」ということをメインテーマにして、漢詩を始めた動機や日頃の研鑽の様子、また人生観や生甲斐、趣味などが動画を使つて視聴できますので皆様ぜひご覧ください。一方「フォト&漢詩」は漢詩とそれに関連したフォト(写真)のコラボです。漢詩に写真が入ると詩が一段と味わい深くなります。こちらの方も是非ご覧いただくとともに、会員の皆様からの作品の応募をお待ちしています。

なお、従来会報に掲載されていた総会終了後石川忠久先生の特別講演も今年からホームページ

ページのトピックス欄で当日配布された資料を見ながら聞くことができるようになりました。

第一回自詠自書交流会開催

発起人代表 上田 尤子

神漢連の有志による「自詠自書の会」を充足させ、標記の晝道展が五月二十日(水)より二十三日(土)まで横浜山手の地で開催致しました。会期の四日間、晴天に恵まれ二百七十五名もの大勢の方々にご高覧頂き、無事終えることができました。ご来場の皆様へのアンケートに依ると、又来年も期待する等四十%もの方から激励を頂けたことは私たちの何よりの支えとなりました。さらに嬉しかったことは今回の書展がきっかけで、漢詩の魅力に気付かれた方が十一%もいらしたことです。色々課題のある中で、ともかく第一回展を成功裏に終え、交流の輪が広がりつつあり、次回に繋げる基礎が出来ましたことを皆様にお知らせいたします。



会員便り



漢詩鑑賞の楽しみ

玉井 幸久

春秋戦国時代の大国楚の興亡の地にひろがる洞庭湖。そこには、数々の神話・伝説が伝わり、又多くの詩人達がそれにつつまる詩を残しています。その中に、ひととき妖しく輝く星のように美しい詩があります。中唐の詩人 銭起(七二七-七八〇?)の「帰雁」で、唐詩選にも収録されています。

この詩を、諸橋大漢和辞典を座右に置いて読んでみましょう。

歸雁

銭起

瀟湘何事等間回 瀟湘何事等間に回る、
水碧沙明兩岸苔 水碧く沙明らかに兩岸苔むす。
二十五絃彈夜月 二十五絃夜月に弾ずれば、
不勝清怨却飛來 清怨に勝えずして却飛して来るならん。

瀟湘は洞庭湖の南の地方、瀟江が湘江に合流して湖に注ぐ辺りで風光佳絶の地。詩は、この水碧沙明の美しい土地をなおざりにして、春の雁は何故北に帰るのかと問いかけ、それは月夜に弾く二十五絃の哀しくさみしい音色に耐えかねて帰ってしまうのだろうと結びます。二十五絃とは大琴(瑟)で、早速大漢和辞典を開くと、次のような伝説が紹介されています。(漢書、郊祀志) 訳しますと、「上古の皇帝伏羲が

神女に五十絃の瑟を弾かせたところ、その音があまりにもの哀しかったので、割いて二十五絃にした」とあります。

この瑟を弾いているのは誰なのか? それがこの詩の眼目なのですが、このままでは分りません。唐詩選の解説書には、この転句の解釈として「湘妃の霊が弾く琴の音が…」としているものがあります。

そこでまた大漢和辞典の出番です。先ず湘妃は伝説の皇帝舜の二妃の娥皇と女英のこと、舜を慕って湘水(湘江)に來り、その崩御を聞き身を投じて湘水の神になったと分かります。次いで湘霊を見ると、湘水の神とあり、次のような楚辞の句が記されています。楚辞は楚の詩賦を集めたものです。「楚辞・遠遊」使湘靈鼓瑟兮、令海若舞馮夷。(湘霊をして瑟を鼓せしめ、海若をして馮夷を舞わしむ)。「海若は海神の名、馮夷は水神の名。ようやく湘霊と馮夷が繋がりました。

次いで湘靈鼓瑟をひくと、「銭起作、詩篇の名、湘水の神霊が瑟を鼓する意」とあり更に次のような面白い記事に出会います。(唐詩記事) 訳しますと、「銭起が科挙の試験に応募する為、故郷を出て江湖(長江と洞庭湖)の地方を旅していた時のこと。ある夜旅館の庭から『曲終人不見、江上數峰青(曲終って人見えず、江上數峰青)』と歌う声があった。そこで庭を見回したがり人影は無かった。翌天宝十年、都に出て試験に臨んだところ、作試の出題が『湘靈鼓瑟』

であったので、あの曲終人不見、江上數峰青の句を末尾に入れた詩を作り、見事合格した。人びとは、この句は鬼謡(亡霊のうた)だと噂した」としてその詩が紹介されています。

湘靈鼓瑟

善鼓雲和瑟 常聞帝子靈 馮夷空自舞
楚客不堪聽 苦調淒金石 清音人杳冥
蒼梧來怨慕 白芷動芳馨 流水傳瀟浦
悲風過洞庭 曲終人不見 江上數峰青

この出題は、前出の楚辞の句から採ったものに相違なく、当時の科挙試験には楚辞が必読の書であったことがうかがえます。

さて、当時の人びとは、銭起は湘霊の歌声を聞き、それを自分の詩に入れることで科挙に合格したのだ、と噂しあいこの湘靈鼓瑟詩を争い読んだことでしょう。冒頭の詩「帰雁」の二十五絃の音の主は、読む人には自明であったのです。

改めてこの詩を静かに口ずさんで見ましょう。水碧沙明の美しい瀟湘の風景の中、湖面を渡るもの哀しい琴の音が聞こえてくるようです。その中で、北に向って飛び去る雁の影がいつそう寂しさを引き立て、何故帰ってしまうの? という湘霊の声まで聞こえて来そうです。詩は、妖しく美しい神話伝説の世界に、読む人を誘い厭かせません。

窪寺貫道先生の「辞書は読むもの」の教えを實踐して得られる、漢詩読みの至福の時です。

漢連関係者の刊行本の紹介

◎石川 忠久 著

『漢詩の稽古』(一八〇〇円) 大修館書店

◎窪寺 啓(号貫道) 著

『同塵舎詩話 第二集』(二〇〇〇円) 同塵舎
問合せ 斯文会館または松雲堂へ

◎大谷 明史 著(三水会)

『渋沢敬三と竜門社』
「伝記資料編纂所」と「博物館準備室」の日々
(二八〇〇円) 勉誠出版

◎岡崎 勝郎 著(三水会)

『下北沢に住んでいたころ』(一五〇〇円)
右文書院

◎磯野 衛孝 著(前神奈川県漢詩連盟連理事)

『壺中詩藻』(個人詩集)

◎川上 天山 編

『韻字平仄便覧』(二〇〇〇円)
増刷ができました。漢詩作詩者必携
問合せ 川上修己

Email: kwkkm23312@tbz.t-com.ne.jp

三吟社詩集発行

好文会『好文会詩集』(十七号で報告)
以文会『以文会詩集』(二十七年四月発行)
詩游会『箱根吟行会詩集』

(平成二十七年四月発行)

漢詩募集のお知らせ
まだ間にあう応募しよう

公益財団法人 孔子の里

◇応募料 無料

◇締切 八月十一日

◇テーマ 「川」または「湖」一人二作まで

◇応募先

〒846-0031 佐賀県多久市多久町1843-3

公益財団法人孔子の里

漢詩コンテスト係

◇詳細 <http://www.ko-sinosato.com/>

◇主催 佐賀県多久市教育委員会

◇後援 多久市文化連盟

静岡県富士山漢詩コンテスト

◇応募料 無料

◇締切 九月三十日

◇テーマ 題は「富士山」または「富士山
に関するもの」一人一首(二首
以上は全て失格)

◇応募先

〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町9番6号

静岡県文化・観光部富士山世界遺産課

広報・交流班

◇詳細

<http://www.pref.shizuoka.jp/bunka/bk-223/fujisannohi/kanshicontest.html>

平成26年度決算報告および27年度予算案

26年度決算・収支内訳

経常 収支	収入	354,000	年会費
	支出	496,779	総会・会報・日常経費・他
	収支	-142,779	
事業 収支	収入	140,500	初心者入門講座
		45,500	研修会
		751,000	懇親会・吟行会・C交流会
		937,000	
	支出	108,004	初心者入門講座
	42,844	研修会	
	711,481	懇親会・吟行会・C交流会	
	862,329		
	収支	74,671	
臨時 収支	収入	571,407	刊行物頒布代・寄付・他
	支出	644,669	刊行物印刷代・頒布費用・他
	収支	-73,262	
27年 先行 収支	収入	354,000	27年度会費・行事参加費
	支出	64,803	27総会案内・行事費用準備
	収支	289,197	
総計	収入	2,216,407	
	支出	2,068,580	
	【年度収支】	147,827	

【期末口座残高】 前期524,479+26収支=672,306

27年度予算

収入	収入	年度会費	小計	340,000
	行事参加費	初心者入門講座受講料等		160,000
		研修会		45,000
		懇親会・吟行会・C交流会		800,000
		小計		1,005,000
	その他収入	佩文齋七絶詩抄頒布代		50,000
		同上講義受講料		100,000
		全漢連HP運用支援料		60,000
		小計		210,000
		収入合計		1,555,000
支出	経常支出	総会・会報・他経常経費	小計	532,000
	行事費	初心者入門講座		100,000
		研修会		45,000
		懇親会・吟行会・C交流会		800,000
		佩文齋七絶詩抄講義		100,000
	小計		1,045,000	
その他支出	10周年記念行事企画活動費		50,000	
	総会講演会テーブル起し代		17,000	
	小計		67,000	
	支出合計		1,644,000	

【年度収支】 -89,000
【期末口座残高】 期首672,306-89,000-26先納= 229,306

二十七年後半のスケジュールカレンダーに記入しましょう

●秋の研修会(春と同様に選句方式で行います)

第一グループ 十月十六日(金)

第二グループ 十月二十日(火)

第三グループ 十月二十八日(水)

場 所 神奈川県近代文学館 二階 中会議室 午後一時より五時まで
参加申込 本会報に同封した詩稿用紙に作品を記載の上、希望日も記入して
左記宛に郵送してください

詩稿提出先 〒216-0033 川崎市宮前区宮崎六-五-九十二 中島龍一宛
提出締切 九月十九日(土) 先着優先

●東京都漢詩連盟・神奈川県漢詩連盟合同吟行会

本年度は東京都漢詩連盟と合同で実施しますので、奮ってご参加ください

・日 時 九月二十六日(土) 十一時~十六時

・集 合 場 所 上野動物園 表門入口

動物園は九時半から開園していますので自由に入園頂き、
午前十一時に表門にご集合ください

・会食及び懇親会 「上野精養軒」

石川先生、窪寺先生が参加されます

・柏 梁 体 吟題韻字による平仄不問の七言一句
任意提出ですが懇親会場で優秀句を選出します

・申 込 み 同封振込用紙にて参加費をお振り込みいただくことで
受付とします。当日振込控をお持ちください

・参 加 費 八〇〇〇円

・申 込 み 期 限 八月三十一日(月)

●鑑賞会C「七絶一步」今後の日程

「七言絶句(二)から一步」の鑑賞会

第二回 七月二十八日(火) 第三回八月二十五日(火) 第四回九月二十九日(火)

場 所 近代文学館大ホール 九月二十九日は公文書館(相鉄線の二俣川)です

編集後記

今回も朝日新聞の天声人語から引用させて頂く。六月二十六日付の記事に和歌山電鉄貴志駅の三毛猫駅長「たま」の訃報について記されていた。この前段として南宋の陸游の詩「猫に贈る」の詩が紹介されていた。これは井波律子「中国名詩集」にあるという。筆者の書棚にはないのでインターネットで検索してみた。二箇所に見つけた。読み下し文と解釈が微妙に異なるので白文のみを記す。

裏鹽迎得小狸奴 盡護山房萬卷書

慚愧家貧策動薄 寒無氈坐食無魚

猫に対する心遣いが感じられる詩である。

もう一つ紹介しよう。朝日カルチャー横浜の会員の詩集「濱盟鶏肋」第八集より、本連盟の会長岡崎満義さんの詩である。詩題「猫兒」

美毛肥肚一身柔 美毛肥肚 一身柔かく

日食佳肴閑自偷 日佳肴を食し閑自から偷む

夜臥温室忘捕鼠 夜は温室に臥し鼠を捕うを忘る

爪牙無用不知憂 爪牙無用憂いを知らず

最近の猫は鼠の天敵ではないようである。

ところで今回の十八号は十二ページに縮小した。いつも記載している石川先生の講演録はHPに音声で掲載している。またCD版を販売することにもした。新しい行事として漢詩鑑賞会C「七絶一步」が六月より始まり当連盟の活動も活発に進行している。会員の皆さんの協力に感謝するのみである。更に後半の行事にも多くの方の参加を期待する。

(香取、川上、中島、三村、吉岡)